
~カミサマ物語~

ムジコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「カミサマ物語」

【NNコード】

N6868Z

【作者名】

ムジロ

【あらすじ】

ある日突然世界から弾き出された俺。なに?俺がいると世界が壊れる?別の世界へ行け?

よし、俺やつてやんよ。超頑張つてやんよ。

新連載 作者の都合 打ち切りにならないように頑張ります。

最強物、ハーレム、理不尽な進行など、その他諸々含みますがそれでも構わん。という器が銀河系より大きい人はぜひ。

第1話 神様って幼女が爺のひつじかだと思つてたよ（前編めり）

がんばるねー

第1話 神様って幼女が爺のひつちかだと思つてたよ

部屋がある。

只々白くドアが一つだけある部屋が。

部屋、と言つてもその広さは計り知れない。

部屋とはもつ言えないかもしれない。

だがそこには部屋なのだ。

生物の氣配はしない。音も響かず、変化もない。

只白く、広い部屋。

ガチャリ、といつ音を響かせながら誰かが部屋に入つてくる。

性別を記すならば女性、それもどぎつくりの美女だ。どこか神々しささえ感じられる。

「やはりいないか……」

女性は何かを探すよつこしてそつまく。

「あいつが現れた氣配はした、もつ空間を何回つた。だがなぜ見つからない、私がこんな失敗をするなど……」

「氣のせいだつたか、と言ひながらその部屋を出よといしたが。

ドサリ、といつ音が、何かが落ちたよつた音が響く。

物体の正体は人。青年であった。

女性は「ヤツ、といつよつた擬音がつきそつなほど笑みを浮かべる。

「やつと来たか、世界に爪弾きにされた者よ」

まるで新しい玩具を買って「えられた子供のように笑う女性。

青年はなぜこの部屋に現れたのであらうか。

……

……

：

それはある朝のことだった。

その青年はこつものみづて作家を出て、こつものみづて学校へ向かおうとした。

「行つてきまゆ」

いつものように形だけの挨拶。だが、それは彼に返つてくるわけでもなく、ただ虚空に響くだけだった。

「今日の夕飯はどうすつかなあ…、材料はあるにはあるがいかんせんレパートリーがなあ…」

彼がこのように主婦的な考えをしてくるには理由がある。

彼の母親は彼が生まれたときにすぐに死去。

彼の父親は不幸な事故にあり死亡した。

彼が8才のときであった。

親戚に引き取られたがその親戚もあまり家に帰つてこないため必然的に彼は家事スキルを磨くことになった

実質1人暮らし同然だったのと当然のことであつた。家計簿をつけのりも彼である。

まあそんなことは置いておいて。

「つー?…なんだ?…いつたい…、胸が…苦しい…」

しばらく歩くと彼は急に胸の苦しみに襲われた。

「…れはまさか…恋?」

何に対してだらつか……

「…こやこやふざけてる場合じやねえよ。まじで苦しこんですけど、

も「ギリギリなんんですけど、色んな意味で」

今彼の周りには人はいない。助けを求めようにも意味がない。

「あー……へんつ、なんなんだよ……あれ? 田の前が、へい

その瞬間彼は意識を失い、
その場に倒れた。

[REDACTED]

「…………うん？ けりや？」

彼が目覚めたのは白い部屋、何もない白い部屋だった。

「やつと来たか、世界に爪弾きにされた者よ」

彼の側には女性がいた。

「……なるほど、夢か。夢ならいいや、もう一度寝てしまおう。きっと起きたら近所の幼馴染みの女の子が起しげに来てくれて嬉し恥ずかしハプニングが発生し互いにドキドキしつつ、意識してしまつ」というイベントが起こるに違いない」

さあ寝るぞー、と彼は言いつつモソモソと丸まろうとした。

ちなみに彼に幼馴染みの女の子などいない。

「…」」「現実逃避をするな、起きろ」

彼の側にいる女性は彼をゲシゲシと蹴りながら起きるよう催促する。

「あー…痛みも感じるなんてリアルな夢だなあ」

「いい加減起きんか！..」

遂に怒りの沸点を越えたのか女性は彼の腹に踵を落とした。

「おふうつ！..」

鳩尾に入ったのか盛大に吹き出し、彼はまた気絶した。

……

…

「で？」「はどこなんだ？夢じゃないってのはわかったし、俺はさつきまで道歩いていたはずなんだが…」

意識を取り戻した彼は現状を把握したのか女性に訪ねる。

「ふむ、もう少し取り乱すと思ったのだが…よく落ち着いていられるな？」

「まあ理不尽な田に畠のは慣れてるといつか慣れてしまつたとい
うか…」

「ふむ…トラックに轢かれかけたり放火されたりピンポイント落雷
が起きたりか?」

「おー…特に落雷がやばかつた。ほほ俺の田の前に落ちたからな、
ゴム性の長靴だつたから無事だつたけどな…」

「……お前は「何で知つてるんだ!?」とか言わないのだな。過去
を知る他人がいたら普通は驚くと思つただが…」

「うん?いやー…何かね、あんたなら知つてると思つたんだよ。…
何でだらり?」

確かに落ち着き過ぎだと思つ。

「ククッ…まあいい、ここのがどこか、だつたな。まあ名前は決まつ
てない。只の『部屋』だ」

「ふうん、部屋ねえ…んじゃあもう一つ質問だ。……あんた誰?何
で俺はここにいる。」

青年は混乱こそしてないもののいきなり知らない場所にいるといつ
不安を感じていた。

「まあアレだ、私は俗に言う神様、つていうやつだ
「ふむ、まあそだらりとは思つっていたけど」

「つまらん奴だな……もう少し驚いてくれてもいいと思うのだが……まあいい……お前がここにいる理由だつたな、それは私が最初に言った通りお前が世界に爪弾きにされたからだ」

「はあ？」

「いや、分かりやすく説明するどだな、まずお前がいた世界の最大容量が1テラバイトだとする」

「ふむふむ」

「お前がいた世界の人間はそれこそ1人の容量はヘクトにも満たない、有能な指導者などがようやく1キロを越えるかどうかだつたんだ。だが……」

「だが？」

「お前が産まれた」

「？」

「お前の容量はテラなどとうに超越していた、それこそエクサやゼタも越えるほどに」

「なにそれこわい」

「……続けるぞ。それでだな容量がこのままではパンクしてしまってならばどうするか、……1番割を食つデータを消すしかない。だからお前はここに移された。お前は神よりの人間だつたからな」

「へー、なるへそね。よつするこ、

俺 爆誕

やべえ」につスゲー重え（データ的な意味で）

どいつするへーについたら世界終わっちゃうよ、

じゃあ弾き出せば良くな?

今いじ。 といづわけか

「ああ、赤ん坊のときはまだ良かつたんだが…成長するにつれて限界がきてな…お前が理不尽な目にあつていたのもそのせいだ、世界がどうにかお前を消そうとしていた、…なぜ生き残っていたのか不思議だよ…」

青年 SIDE

ふむふむ、要するに俺スゲー、といづことね。

まああの世界に未練なんかないしな。別にどいつてことねえけど。
大切と思える人も1人もいなかつたし。

あれ?でも俺ここに来たはいいけど…何しゃいいんだ?一応まだ未成年だしなんもすることなくね?

はつ!?もしかして一ートか!?一ートになれるのか!?
それだつたら俺はどつても嬉しいぞ。

寝て、食つて、遊んで、また寝る。

……何とこう楽園……。

「おい神様、ここに連れてこられたはいいが俺は何しやいんだ? 梦の二ート生活ができるのか?」

「馬鹿かお前は……お前はもう神よりの人間だと言つただろ。お前は言つなればカミサマだ。もちろん寿命の概念は無いし老けることもない、殺されれば死ぬがな、……お前はまだ未熟だからな、修行してから違う世界にでも行つてこい」

ジーザス……神は死んだ……あ、俺の目の前にいるや。

ん?修行してから違う世界に行く?

……どうことうことだ?

「まああれだ、神様に近いカミサマになつたとはいえ今のお前は只のパンピーだ。刺されれば死ぬし潰れても死ぬ。経験も足りないからな、修行なりなんなりして戦争がある世界にでも行つて来い」

「なんでだよ! カミサマってそんなにデンジャラスなことしなきゃならんのか! ? あれか! ? 神様同士の喧嘩でもあんのか?」

「いや、神同士の戦鬪はあまりないのだがな……神が悪ふざけで殺した者に力を与えて違う世界に、マンガなどの世界に送るやつがいてな、転生者というやつだ。……好き勝手やりすぎて物語がめちゃくちやになるのだよ。お前にはそれを防いだりしてほしいんだ」

なんじゃそりや？つていうかマンガの世界つてあつたんだなあ…まあもしもの数だけ世界は存在しているつていうしな。無いこともないんだろう。

「力つてどんのが』『えられるんだ？そいつらには」

「私はそんなわざと人間を殺して楽しむような下衆な行為はしたことがないからよくわからんが…たしか『王の財宝』？とか『～の魔力100倍』とかを与えたりしたとか言つていたな、よくわからんが。まあその神は下衆な行為をした罪で「滅」したが」

いや無理ゲーだろ。勝てねえよ。指先一つでダウンさせられるわそんなもん。いや、俺にもそういうのがもらえるのか？それだったらまだ…

「や、ひんぎ」

「うおい！死ぬつて！間違いなく！くれよ！」

「はあ……お前なにか勘違いにしてないか？」

「は？」

「せつとき語つただろ？お前の容量は馬鹿でかいと」

「あ、ああ。それがどうかしたのか？」

「他の人間の容量は小さいからな、強くなるにしてもたかがしれない。お前がそんなもん持つていても宝の持ち腐れ、邪魔になるだけだ。そうだな……10年、10年だな、それだけ真面目に修行し

ていたら転生者なんぞ雑魚に感じるようになる。指先一つでダウンさせれるようになるぞ。1000年で私にも並ぶだろくな

「おう……まじですか。ん?でも……

「あんたはそんなに強えのか?」

「あたりまえだろ? これでも最高神だからな、私からしたら随ドングリの背比べだ。なに、すぐにお前も私くらいのレベルにまで上げてやる? いい暇つぶしにもなるしな」

「は?…………最高神?」

「お前ってそんなに偉かったのか? つか俺もそこまで強くなれるのか? 実感がわかねえんだが」

「私が最高神だと知つてもお前は態度を改めないのだな……」

「それが俺クオリティ」

「ふふつ、まあいい、お前がおもしろいやつだといふことは十分わかつたからな」

「褒められてるん……だよな?」

「さあー、そつと決まればさつそくやるやーー! とつあえず田標は下級神だ! 転生者なんぞ通過点だからな! みつちりシ「」してやる? なに、転生者の数はそんなにいないし平和に暮らしあうとしている者のほうが多いからな、質の悪い奴は極少数だ、観光気分で行つてこい。恋人でもつくつたらどうだ?」

「おい！待てって！大事なことを忘れてるぞー！」

「む、大事なこととはなんだ」

「自己紹介だよ自己紹介、いつまでもお前だったりあんたって呼ぶわけにはいかんだろう？俺もできるなら名前で呼んでもらいたいしな。まあ神様だったら知っているとは思うが」

「おお！すっかり忘れていたな！私と同格の者が来て少々舞い上がつていたようだ、わたしの名はルーだ、よろしく頼む！」

「ルー、ルーだなわかった、俺は……天月、天月早紀だ、よろしくな。女みたいな名前とか言わないように」

……………こうして俺の『物語』が始まったのであった：

『カミサマ物語』第1話 完

第1話 神様って幼女が爺のひつぢかだと思つてたよ（後書き）

がんばつ たぞー

第2話 キングクリムゾンって便利だよね

S H D E 早紀

どうも、早紀君です。修行といつがこのごじめを行つてから早100年。それなりに強くなりました。

ワーアーパチパチ

……何だつて？飛ばしそぎ？いいじゃないか、めんどくさいんだもの。

君達は器が大きこと早紀君は信じてるよ。

まあ回想はしてみよつ。折角だからな。では、ダイジョブでどうぞ。

（回想）

「よし……早速修行開始だーー！」

「せんせー、なこするんですかー」

「とりあえず私が攻撃するから避けろ。えーと……何だつけるか……あ、あれだ、『マスタースパーク』」

「えつー？おい、ちょ待てー」

＼ン—ユチピ／

A scatter plot with 10 data points. The x-axis is labeled with X1, X2, X3, X4, X5, X6, X7, X8, X9, X10. The y-axis is labeled with Y1, Y2, Y3, Y4, Y5, Y6, Y7, Y8, Y9, Y10. A dashed diagonal line represents the identity line. The data points are as follows:

x	y
X1	Y1
X2	Y2
X3	Y3
X4	Y4
X5	Y5
X6	Y6
X7	Y7
X8	Y8
X9	Y9
X10	Y10

「ふたり殺すぞ」コーマン

「いや正直すまんかった」

「避けれるか馬鹿。何弾幕張つてんだ馬鹿。残機3残つてなかつたら死んでたわ馬鹿」

「（いや、残機がある時点でおかしいのだが……）」

「せんせー、最近の若者はキレやすいんですねー」

「い、いや。次からはちゃんとやるから大丈夫だ、うん」

10年後

「だ、か、らあ……少しば手加減しやがれ……なあにが『燕返しひー』（キリッ だ、ふざけんなよマジドー！）一度に何回と来る軽撃を避けれるかあ！」

「何を言ひ、なんだかんだでついて来れているではないか。大丈夫な証拠だ。さて、次は何にしようか……」

「楽しんでんじゃねえ！！」

100年後

「かめはめ波アアアアツツー！」

「うおつ！危ないではないか！」

「撃てた……健全な男の子ならば必ずやるであろう黒歴史の一つ……かめはめ波を……感動……」

「むう……ならば私は……元氣玉アアアアツツー！」

「切り札をそんなに簡単に使ってんじゃねえーー！」

500年後

「ん？ ルー、なにやつてんだ？」

「なに、暇なのでなんか面白そつな技ないかなあと思いネットに入り浸つておるのだ」

「ほらー！ そんなことやつてないで勉強しなさい！ …それか外に出て遊びなさい！ …だから友達もできないのよ！ ?隣の家のタカシ君を見習いなさい！」

「おーおい母さんこんな格言を知らないのかい？ 『他所は他所、家は家』それに外に出ないと友達ができない時代はもう終わつたんだ、ほひ、私にはこんなにも共に動画に弾幕を打ち合ひ仲間たちがいる…」

…

「駄目だこいつ…早くなんとかしないと…」

900年後

「ストナアアアー！ サアアーンー！ シャアアアアイイインッツー！ !」

「カイザアアアアー！ …ノヴァツツツー！」

ドオオオ――――ンノ―――！

「…………やつすがれりやつたな」

「「つむ……もづきし血腫するべれだつたな、やつすがれてしまつた」

「ちなみに今どれくらいの威力だつた?」

「私とお前の攻撃で……」つむ、少なくとも壁一つは逝ってしまった
な」

「怖ッツー！」

あるえー？なんか……遊んでばっかだったなあ……。

いや、一応やることはやつてたからなまあ大丈夫だろう。自分の戦闘スタイルも確立したしな、いろんな便利な魔法的なものとかも教わったし。

人間の限界は超越したが。

といふか時間の流れがよくわからなくなつてきてんだよなあ……

不老つて不思議。

閑話休題（一回は使ってみたいよね）

でもなあ…ルーの奴1000年もすれば私に並ぶとかいいながら全然追い付けてないんだよな…。

他の神様との小競り合いとかだつたら問題無く勝てるようになつたんだけどなあ…。

とこりか思いつきで修行の内容を変えすぎなんだよ…なあにが「感謝の正拳突き10000本!!一首をも置き去りにして、光をも超え、亜光速をもぶち破るのだ!!」だぢくしようめ。

人の都合を考えろ。俺は感謝することなどあんまり、といりか全く無いんだよ。

あれか、お前の独裁者つぱりに感謝しろつてか。

しかも人が必死こいてる間にインターネットなどやりやがるし。

同じMADを何回も何回も何回もニヤニヤしながらやがつて。

貴様なんぞ実況プレイ動画でも見ながら白熱してろ駄目人間め。

あつ人間じゃなくて神か。
この駄神め。

「むつ~さつきからずっと罵倒されている気がするのだが」

「そんなことはない、気にすんな」

「むう…釈然としない…」

ああ、神様だから心くらこ読めないのかよ、とか思うかもしない
がそういう類のものは俺は自動的に防^{レジスト}御してしまひじー。

あの某ドラゴンでクエスト的なRPGで流れる軽快な音楽を流しながらレベルアップしてこつたことは伊達ではない。

當時マホカンタ、リフレク状態であるといつても過言ではない。
（精神的な意味でね）

さて、長々と考えていたがそろそろ行動に移ろつか。

「で、年月的には結構経ったしやるこじもやつた。もつ違つ世界に行つてもいいのか？」

「そりだな、もうこいだろ。準備をするので待つてこり

了解つと。…………ん?そりこえば……。

「その世界は俺が行つても大丈夫なのか?容量とかあるんだ?」

俺が行つた瞬間に世界がパンクでもしたりお話にもならない。多少の罪悪感を感じることになつてしまつ。

「大丈夫だ、制限も掛けるし容量的にも問題ない。それに……お前は神性が欠片も見当たらないからな、1000年も生きておいてなぜ人間のままなのだ……」

そう、今ルーが言つたように神や長く生きた獸などは神性という一種の崇められ、力が増すという性質を持つようになる。

獸は神性を纏つて神獸になるらしいし神性が大きければ大きいほど神の位も上がっていくらしい。中には長く生きたわけでもなく、他の神や神獸などを倒し、力を吸収するという奴もいるんだとか。

俺はあまり知らんが。

ちなみに俺の神性は一般人に毛が生えた程度なんだとか。

……なぜ増えない？

「神性が捻じ曲がっているからではないか？」

「お前にだけは言われたくねえ」

まあ別に無いとこまるようなモンでもないから構やしないんだが。ただ他の神っぽい奴らに舐められるのはむかついたなあ……なんか死を司るとかいう中一病まつしぐらな神がきて馬鹿にされたのはむかついたからなあ。ほんとに。

しかも武器が鎌つて……何処までテンプレを極めてんだよ。
まあすぐボコボコにしてついでに鎌も奪つておいたが。

泣いてたなあ…あいつ…まあ喧嘩売つてくるほうが悪い。俺の機
嫌が良かつたらここんと返してあげよ。こんな振り回しじつらモノ
はいらん。

正直邪魔。

「ん? 制限つてどれ位だ?」

「ん~……3、4割? ん~、悪いな、分からん。世界に入つてから
じゃないとな、少々予想がつかん

「解除とかつてできるのか?」

「その気になればできる。あんまり長い時間はダメだけどな

「ん、了解」

まあなんとかなるだる。そのぶん自重せず暴れりゃ おうかな

「駄目だぞ」

۱۵۷

ケチめ。

「おしつ！準備できだぞー！さあ、行くのだー！」

「おこ」

「なんだ？」

「穴うでどういうことだ」

そう、今俺の前にあるのは人が2人位入れるような穴。正直入りた
くはない。

「テンプレだらう?」

「こんなテンプレこれら、扉なんかにしの」

「ちつ、我が儘な奴め」

「普通だバカ」

よく考えればわかる」とだ。

「つと見せかけて、うらあーー！」

「え？、おこ、ひめ？」

「こつ押しあがつた…せみこ落ちる落ちる落ちる…」

「正直創りなおすのメンディー、ここに」とで、こつてらっしゃいだ

「お前今度覚えてろよコルニアアッシュ…」

とこつか何処行くのか聞いてねえ…心の準備とかあるだらうがち
くじゅう…

『カミサマ物語』 第2話 完

第3話 落ちた先には金髪幼女（前書き）

タイトルで内容がわかるという…

今さらですが名前のつけかたについてです。

主人公の名前 適当

神様の名前 ケルト神話なんかでこんなのがいたはず…

みたいな感じです

第3話 落ちた先には金髪幼女

s.i.d.e 早紀

はこどりもへ、早紀君です。

今、絶贊、

落 下 中 で す。

いや～結構な高さだわコレ。たぶんこのまま落ちたら美味しそうなジャム状態になるんだろうなあ…。

洒落にならないね、うん。まあ実際落ちても死にはしない。痛いけど。

さて、ここで慌てず騒がず落ち着いて…っと、よじよじ浮けた浮けた。舞空術的なアレである。

なんか気とか魔力とかエネルギーは使っていない。浮きたいと思つたら浮けた、そんな感じで使つている。

ゆっくり降りましょ、人間急ぎすさむと良ことはありません。
足を踏み外さないとも限らないからねー…………フリグか？

てー！

血鬼めーー！

あん？なんか聞こえたか？まあこいや。よいしょっと。

「グハアッー！」

あつやべえー何か踏んだーしかも感触的に生き物…しかも声がした
といつことは人間！？
どうしましょ。

神は言つてこの…マッハで逃げると…

よしー逃げようー道を間違えたとでも言つただ。そうだ、それじゃ

う。

謝れば許してくれるや！

「すいません、道を間違「何だ貴様は！！我らの邪魔をするとは！
！まさか！貴様も吸血鬼の仲間か！！」話を聞こひぜボーア…」

ん？吸血鬼？なんか物語のキーマンっぽい響きだな…氣のせいか？

いいや、無視だ。面倒ことはスルーの方向だ。

金髪の幼女がこっちを睨んでいるがスルーだ。

「いえ…！…とんでもない！僕は関係ないですよ？飛んでいるときに
力が出なくなりまして……落ちてしまつたのですよ」

名演技だとは思わないかい？諸君。

「なんだと？…魔力切れでも起こしたのか？…ふん、確かに魔力が
ないな。飛べなくなるのも事実か。まあいい関係がないならどけ、
貴様など邪魔なだけだ」

キタアアアアア…！…話せばわかるね！言い方が超ムカついたけど我
慢さあ…！…大丈夫！俺は忍耐力がある大人…！…それに大事なこ
ともわかつた。

あのモブAは確かに『魔力切れ』と言った。ということはこの世界
には魔力などの概念がある、よつは争いがあるような世界だといふ
ことだ。念のために隠しておいて良かつたな。

流石俺。頭が良い。

「せういえば吸血鬼ってどうですか？記念にちょっと見てみたい
んですね」

「うむわこべ貴様！！それに危険だ！関係のない奴は去れ！…」

「大丈夫ですよ。それに貴方達は凄く強そうですし吸血鬼なんぞ一
捻りなんでしょう？」

「ふ、ふむ。わかっているではないか。吸血鬼はあいつだ」

「こいつ扱いやすいなあ…。モブBもモブCも照れてんじゃねえよ。
んで吸血鬼はどれだ？ムチムチのおねーさんとかだったら助けよう
かな…

あ？
.....

「すいません…あの幼女が…」

「我々正義に対する悪！吸血鬼だ！」

はあ？あの幼女モブの娘とかじゃなかつたのか？家出幼女を追う親的なものではなかつたのか？

誰が幼女だ！と叫んでいるが無視だ。

「ちなみに捕まえたらどうするんですか？」

「貴様は頭がおかしいのか？吸血鬼だぞ？殺すに決まっているだろう。いや……我らの慰め者にしてから殺すのもありだな。クツクツク……我らは正義だからなー我らの行う行為は正しいに決まっている！…」

うわあ…「んなに恥ずかしこ」とを堂々と言ふるなんて逆にすげえな。

いい大人が正義とかなんとか…羞恥心は存在してないのか？しかも口リコンか？救いようがねえな。

……ふむ。

「おい！幼女！助けてほしいか！」

「貴様はさつきから急にやつて来てから幼女幼女と…ふざけているのか！助けなどいらん…！」

ふむ。実力的には幼女のほうが数十倍も実力は上。だが攻撃を受け
て疲労中つてどこかな。
クソッ！何故幼女なんだ。そこはおねーさんにしつけよ。

『助けてくださいありがとうございました…』

『いえ、当然のことをしたまどですよ。美女は放つておけない性質
でして（キリッ）』

『まあ…素敵なお方…。あのお礼と言つてはなんですが…私なんて
どうですか？』

『それは“そういう意味”と捉えてもいいんですか？』

『…………はい』

『やつですか、ではそのお礼、喜んで頂きますね』

『キヤツ……あ、あの、私初めてなので……優しくしてください……
ね?』

『はい、まかせてください。気持ちよくしてあげますよ……』

『ああ…………あん…………ああ……イイ……自分で慰める
のと全然違う……』

『まだまだ気持ちよくしてあげますよ……本番はこれからです……』

みたいなことを考えていたといつのこと……俺の気持ちを弄びやがつ
て!!

「何を言つているんだ貴様は……やはり吸血鬼の仲間か……」

「待て待て、まだ助けようとしてない」

「じりばっくれるな!闇夜切り裂く一條の光、我が手に宿りて敵を
食らえ!』『白老団』……』

うおおづーなんかビリビリしてやうなのがこっち来てる……どうあ
えず……回避い!!

「あ、ふねえじやねえかバカヤロー……殺す氣か」「アリマア……」

「ふん！本性を現したか吸血鬼の仲間め……貴様らは悪なのだから殺すに決まっているだろ？！……」

「悪悪言つてるけどお前らのほつが絶対悪だからね、幼女追い掛け回している時点で青い服着た国家公務員に捕まるレベルだからね。しかも傷害罪も加わるからね」

「なー我らが悪だとーもう許さんぞ貴様！来れ雷精、風の精！！雷を纏いて吹きすさベ南洋の嵐、『雷の暴風』ー！」

またなんか來たし。俺なんもやつてなくね？あれ？すぐこいつライラしてきたぞ？もう反撃していいよね？

「つーかさつきから鬱陶しいんだよー！バリバリバリバリうるせえのは思春期の暴走族くらいで充分なんだよー……つりあーーー」

こんなもんルーの悪ノリした攻撃に比べたら屁みたいなもんだ。よつて……

「殴り返すー！」

「な、なんだとーーーう、うわあああーーー」

汚え花火だ…（弾けてはいません）

「つたくよー、こきなじ喧嘩売らなこどもしげね、こいつは平和的に終わらうとしたのによー」

「おー」

「Hンカウントしたら即戦闘とかねーよ。チューーリアルはやめよ。最近のやるゲーマー舐めてんじやねーよ」

「……おー」

「ましてやなんで最初からライデイン使つてくれるんだよ。一番最初の敵はスライムだろうが。ひのきのぼうで倒せる敵つれてこいや」

「でもどうせだったらぶちスライムのほうがいいな、あれだったら
いけ」「おいと言っているだらう貴様！！話を聞け！！」「あれ、
幼女よ、まだ居たのか」

まったく気付かなかつたぜ。

「 もう きから呼んでいるのに無視しあつて……舐めているのか!!」

「うめん、素で忘れてた」

side 幼女

「『めん、素で忘れてた』

なんなのだこいつは！追われていたところに急に現れたと思つてい
たら…

最初は敵の増援だとと思っていたのだが…、何が助けてほしいか、だ
！！私を誰だと思っているんだ！！

『闇の福音』エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだぞ！！何
が忘れていただ！！

だが今はそれよりも…

「なぜ私を助けた」

吸血鬼である私を追う奴は数多くいたが救おうとした奴は1人とし
ていなかつたからな…こいつは何故私を助けたのだ？

「あー…流れで」

「流れとはなんだ！！流れとは…！」

「こ、こいつ…やはり舐めているな！？」

「お前はあの魔法をどうやって跳ね返した！それも魔力による肉体
強化も何も無しでだ！」

これは私が最も聞いたかったこと。魔力による強化で魔法を避ける、

打ち消すなどなら普通にあることだからわかるが… もののかぎり
考えても生身で魔法を打ち返した…
どうこういふとだ…

「殴つたらいけた」

「理由になつていないだろ？」「…」

適當か…！

「しかしやかましい幼女だな、カルシウムとれ、カルシウム。助け
てもらつたんだからありがと」「やあすで終わつとけよ」

「誰のせいでこんなに醜いことになると嘆いてくるのだ…！」

side ハヅマングジHリン END

さて、これからどうつかね。まわりは殺風景だしね。

町とかないかなあ…探してみるか。

『カミサマ物語』 第3話 完

第3話 落ちた先には金髪幼女（後書き）

感想をくれてもいいのよ？——（チラリ）

第4話 幼女に物事を教わる……なんかやだな（前書き）

話が進まないZE

第4話 幼女に物事を教わる……なんかやだな

s.i.d.e 早紀

さて、これからどうするべ。と迷つて歩いているのだが……

「幼女よ、何故着いてくる」

「だから私は幼女ではない……』『闇の福音』H・ヴァンジH・リン・A・K・マクダウェルだ……」

なんですかその中二になー一つ言は、聞つてなんだよ聞つて。

「わかつたわかつた、H・ヴァンゲリオン・A・K・マクドナルドな、うん、覚えたぞ」

「違つわ……』A・K』しか合つてないではないか……」

あ～もうやがましいなあ……何でもいいじゃないか。

「よくないー」

心読むなし。

「で？本当になんで着いてきてんだ？なんか目的でもあるんだ？」

「家なき子ではありそりうだが吸血鬼といふことではやはり長く生きているらしい。なにか考があるのだろう。なんだかんだでこの幼女結構強そうだ。さっきも助けなくても普通になんとかできただろう。

「貴様の魔法の打ち消し方はどう考へても異常だ。それをより近くで見れば理由がわかるはずだ。私は今でも充分強いが力をつけるに越したことはない、だから貴様はその手品のタネを教える」

「偉そうに言つねえ。手品でも何でもないんだがなあ……、あんなん身體を強化しなくても余裕で消せる。
直撃しても痛くも痒くもならない。

「やだね、身体を鍛えろ幼女よ。あんなん指一本で消せるようになるまでな」

「そんなことができるわけがないだろー！……もういい。最後通告だ、素直に私に魔法を打ち消したタネを教えるか、……死か。どちら

らか選べ。私を「ケにした」とは聞かなかつた」としてやれり

はあ？なに言つてんのこの幼女。確かにこの幼女は強そうだが……
ルーに鍛えてもらつた俺からしたら有象無象レベルだぞ？制限掛か
つてゐる今の俺でもまったく苦戦しないぐらいい。

力の差ぐらいわかると思つたんだが……

「なに？俺つて弱く見えるわけ？」

まあ弱く見られるのは全然構わない。相手が俺を下に見て侮つてくれればそのぶん色々楽になるし。

「ふん、魔力が欠片も無い奴が強くみえるわけがないだろ。それ
に足運び、構え、気配の察知能力から考えても只の素人だ」

あー……、そういうや抑えてたねそういうの。足運びと構えはわざことだ
が……。

気配の察知能力？……ああ。この幼女何回か俺のこと殺そうとしや
がつたな。結局未遂で終わつたが。

あれは俺を試そうとしてたのか、多分来たら反射的に殺つちゃつて
ただろうな。さすがに幼女を殺すのは嫌だ。

あんまりちょっかいかけたくなかつたんだがなあ……
ま、ちょっと痛い目に合つてもらうかね。

俺は体の力を全て抜き、脱力した形で一瞬で幼女の後ろへ回り込み爪を幼女の首に当てた形で停止した。

「はい、一回死んだ

「なーーなんだとーー（）の私が全く見えないとーー（）」

こんくらい初歩の初歩だ。相手に気付かれることなく瞬時に殺す暗殺者紛いのやりかた。これは真っ先に覚えた。ん？なぜかつて？楽じゃないか、すぐ死んでくれると。

まあこれの進化版の技も何個があるんだが…それはおいおいと言つことで。

「まあ…力の差はわかつたかね？吸血鬼と言つことは不老不死か？うーん…まあ殺せないことはないから殺つてもいいんだが…めんどいから負けを認めてくれると俺は嬉しい

「…………もし、もし抵抗したら私はどうなる」

「ううん…そりゃなあ…めんどくせこし、人に恩も感じないよう
な馬鹿だつたつてことで動けないようにしてどつかの教会にでも置
いてつてやるよ、まあ十字架に架けられて火で炙られたりするんじ
やね？経験済みかもしれないが、もう一回炙られて来い」

「…悪かった、だから許せ」

「あ～ん？なんだつてえ？」

困ったなあ。爪が勝手に幼女の首に刺さつていくぞ～？

「ぐつ！私が悪かった！だから許してくれ！」

「よひしー」

最初からもう言えばいいのに。全く、仕方の無い幼女だ。

「……くつー貴様絶対に良い死に方しないぞ」

「奇遇だねえ、俺もそう思つていたところだ」

俺は死なんがな。俺に敵意を持ったやつは消滅させてやる。死ぬくらいだつたら土下座しても生き延びてやる。そして俺は自分の女と有意義に暮らすのだ。

「んじゃあ可哀相だからタネ明しだ。魔法を打ち消したのはマジで殴つただけだ。あんな貧弱な攻撃が俺に通るわけないだろう。んで魔力の件についてだが隠しているだけだ、自分がどのくらいの量を持っているかわからんからな、オーケー？」

なんかあり得ないって顔してんな。

「……もう一つだけいいか

「うん?なんだ?言つてみ」

欲張りな奴め。

「貴様はその力をどうやって手に入れた

そんなの

「鍛えたからに決まつてんじやん」

「だから……貴様は只の人間だろ？……しかもまだ若い、いつ鍛えたといつのだ。10年やらせいらあんな」とはできないだろ？」

「うん、10年じゃ無理だな。だから1000年も鍛えたんだ」

「だれ？100年やらせいらで……」

「どうした」

そんな鳩が豆鉄砲くらつたような顔して。

「い、いまなんと言つたの？」

「1000年鍛えた」

「なんだと？貴様不老不死か！」

「うんにゃ、不老だけだ。死にはする、お前が何年生きてるか知らんが人生の先輩だぞ？敬え、崇めよ」

「なるほど……勝てんわけだ……」

やつと敵意がなくなつたな。いや、これは……諦めに近いものだな。

「じゃ、やつこり」と

もつ俺は寝たいのだ。町を探しに行く

「ま、までー」

「んだよ」

また喧嘩売つてきたら今度こそ殺す。慈悲など無い。

「わ、私も着いていっていいか」

「おひ、いいだ」

「いや、そんなこと言はずに…………って、え？」

「ちよつとよかった、俺道わかんねえんだよ。あと色々聞きたいこともあるしな、ほれ、行くぞ」

魔法とか魔法とか魔法とか、この世界の攻撃手段を覚えたたら特に目立たなくなるからな。郷に入つては郷に従えつてやつだ

「い、いや。拒否したりしないのか？私はお前を殺そうとしたのだと？」

「大丈夫、お前程度じゃどう足搔いても俺には勝てない」

「いやまあ……たぶんそうだが……」

「ほれ、さつあと行くぞ、俺はもう寝たい」

「あ、おーーお前の名はなんというのだ?」

「あー… 言つてなかつたつけ… 天月早紀だ』主人様でも早紀様でも好きに呼べ」

「いや、遠慮せてもらうが…」

「ほれ、行くぞ、エヴァンジルン」

「…っあ、ああ。……その… エヴァでいい」

「あん?」

「敵意を示さない証のよつなものだ!だから… その… エヴァでいい

「あい、りょくかい。行くぞ、エヴァ」

「あ、ああっ!」

第4話 幼女に物事を教わる…なんかやだな（後書き）

主人公についての捕捉

早紀はけつしてフェミニストというわけではありません。

老若男女問わず平等に接し、平等に殺ります。

早紀は1000年生きているとはいえたまだ人間です。決して殺しに耐性が付いているわけではないですし、快楽殺人者ではありません。

ただ1000年も人付きあいがなかつたので少し壊れています。

あいつがうざい

よし、殺そう

となるくらいには短絡的な思考をしています。

この思考回路は人と接することによって多少は治ります。殺さずに半殺しレベルに抑えるとか。

人は一人では生きていけません。ルーがいたとはいえ、友人と呼べる存在があまりにも少なすぎるためです。

文中で美女との情事を想像していたのも繋がりを得たいという裏返しです。

カミサマになる前も繫がりは存在していました。

なので繫がりを得たら結構大事にするでしょう。
裏切られたら即殺ですが。

…………… というのが裏設定。これは最初から考えていた設定。

この話は基本「メテイ」なので繫がりがどうとかはどうなるか未定（
笑）

カミサマになる前の早紀を書いたらなかなかのシリアスになってしまつ…

…………無理つすね（笑）

作者にシリアスは向いていない。

長々とすいません。彼は決していい奴ではないと言いたかっただけ
です。

…………キャラ設定でも書くかな。

第5話　「れが転生者　ねえ　鬱陶しこなあ（前書き）

今回は魔法回と転生者との邂逅。

わざとあつとり転生者はやられますが『戻』しないでください。

第5話　「れが転生者　ねえ　鬱陶しいな

side 早紀

さて、今俺は何をしているかといつと……

「火よ灯れオオツ！！」
アールデスカット

「だから強引にやつても無理だと言つておひつがあーー！」

魔法を習っています。

なにこれ、全然できない。詠唱を覚えるとかまじで無理。

なんで？エヴァによると魔力だけはアホほどあるらしいのに。

「早紀は魔力コントロールが下手すぎるのだ。身体能力が人外でも纖細な作業ができるいない」

なんでかなあ、もしかして精靈とやらに嫌われてんのか？

……あり得るな。

「火よ灯れオオツー！」
アルデスカット

「話を聞け！――」

「話を受け！――」

「出るよおうあ――出ないと世界壊すぞ――」

「早紀はどういうイメージで魔法を使おうとしているのだ？」

それは……

「ギュウッと集めてドカンとする感じ」

「そんなんができるか！――」

怒られちつた…

「駄目だ、纖細な魔法は俺には無理、とにかくことで大技を教えようか」

「初心者用の魔法もできんのに大技ができるわけなかりや――」

なんだと。やつてみなきやわからないじやないか。

「確か詠唱が覚えられないんだつたな…」

「うん、無理。なんであんなクソ長いの？一言で発動するよつ」
とけよ

「いや、それは無理だが……そうだな、大技となると『千の雷』『燃える天空』私も使っている『こおるせかい』『おわるせかい』などだな、ただしこれらを使うには『えいえんのひょうが』という魔法を覚えねば使えんが、他の魔法も熟練者が使う魔法だ。そう簡単には……」

「燃えろおッ！…天空…！」

「オオオオオオオオ！…！」

「出たぜ」

「……色々言いたいことがあるがまず言つておくのは……何故初心者用の魔法が使えないのに広範囲焚焼殲滅魔法が一発で使えるのだ…おかしいだろ？…しかも詠唱無し、ラテン語ですらないしな…！…そんな抽象的なやり方で魔法を使つやつは初めてみたわ！…」

ほらみる、やはり俺には「ついに」大雑把な魔法が向いてるんだよ。精靈が俺を嫌うつてんなら強制的に従わせるまでだ。一言で充分だ、一言で。

「うし、もう魔法飽きた。よって本日の授業は終了、寝る

「あつ、おい……お前から教えを求めたからわざわざ私が教えてやつたといつのになんなのだもつ……」

なんかエヴァがブツブツ言つてゐるが知らん。魔法もそれっぽいの撃てたからもういいや。

ん?

「おい早紀」

「わかつてゐ、なんか近付いてきてんな……そじそこの魔力、敵か?」

「わからんが……私を討伐に来るのだったりもつと大勢で来るはず……」

そういう吸血鬼だからこいつ追われてんのか、忘れてたよ。

「さて、なにが来るかな?なんの用もない魔法使いだつたら無視。敵だつたら俺の眠りを妨げたから即殺決定なんだが」

⋮
⋮

「おい、お前……俺のエヴァたんから離れる……」

「うわあ……色々とうわあ……」

「な、なんだ貴様は……」

なんか来たよ……こいつ頭とか大丈夫なのかなあ。顔は……まあイケメンだな。ただ俺の鍛えられた観察眼がイケメン（真）ではなくイケメン（偽）と伝えている。何かが違うんだよ。

「なに？お前誰かの所有物だったの？じゃあ俺絶賛誘拐中？やべーよ、犯罪じやん。勘弁してくれよ」

「そんなわけなかろう……あんなもつ見たことも聞いたこともないわ……」

「待つててねエヴァたん……今そいつから助けてあげるからね……」

なんだよもつ……まあいや、あいつは敵。といふことは？

「眠りを妨げたから死刑決定、異論は認めません。おいエヴァ……」
「本当に知り合いじゃないよな！殺しちゃっていいよな……？」

「だから言つていゐだろつ……そんなやつは知らん……」

「俺のエヴァたんと喋つてんじやねえ！契約により我に従え高殿の王来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ遠隔補助魔法陣展開！」第一から第十目標捕捉！範囲固定！域内精霊圧力臨界まで加圧！百重千重カイキーリアキス」と重なりて走れよ稻妻！！『千の雷！！』」ト・ショーンボライオト・ショーンボライオイ・パシレク・ウークタ・エガリーム・アド・デキムバー・アーレア・コンステッキン・ウス・セー・フレッド・フレッシュラム・クリティカル・カブティント・オブイエラード・フレッド・クリティカル・アストラベー

長い詠唱お疲れ様でした。でもねえ…

「聞かないんだよ、そんなん」

迫り来る雷の雨を避けることもせずただ手で払う。それだけで魔法は焼き消される。

「な、なんだと！－俺の全力だぞ！？まさか…能力があるのか！？クソッただ魔力がテカイだけと思っていたのに！」

「よし、もういい。死ね」

飽きた。手前！」ときの攻撃なんぞ効かねえ。

「ちよつー待つて！お前も転生者だろ！？同じ同郷のよしみで許してくれよ！悪かつたつてば！－俺のハーレムのおじぼれもやるから…！」

やつぱり転生者か。たぶんそうだろうとは思つてたけど。ああそういうや聞きたことがあるんだった。

「…………世界なんだ？それを答えたう考へてやる

「へつ？え、えつと『ネギま』を知らないのか？」

『ネギヰ』か、あ~~~~~。何だつたかなあ……思い出せねえ。
どつかで聞いたことはあるんだよな~。まあ知らないでもひづこでもなるよな。

「うんわかった、もういい。じゃあこれから俺がいつ言葉を呴いて
いけ。そしたら助けてやる」

「おこ、そいつを生かすのか!? また襲つてくるかもしれんのだが
……」

「あ、ああーわかった! (クククッ馬鹿な奴だ。助かつた瞬間にこ
っちからやつてやる)」

「じゅ、皿ついでー。『ビハカ』」

「ビ、ビハカ」

「『私を』」

「わ、私を?」

「『殺して貰ださこ』」

「殺して……え？」

「どうした？言わないのか？言わないと死ぬんだぞ？」

かく、どうするかな？

「いや、でも『殺すぞ？』『ツツー』、殺して貰ださこ……」

ブシュウウ——ストン。

「……あ」

「よかつたな、願いが叶つたじゃねえか」

手刀で首を刈り、その首が地面に落ちる。

まあ敵対した時点でこいつに生きるという選択肢など存在しない。転生者だつたし殺しても大丈夫だろう。なにがおこぼれだ、偽の顔でいい気になつてんじやねえよ。

「……お前は本当に容赦がないな」

「容赦? なにそれおいしいの?」

「……ハア。まあいい、その死体、どうにかしろよ」

「オーケー。燃えろおッ!! 天空!!」

「オオオオオオオオ！－！－！」

「死体一體を燃やすのに殲滅魔法を使うなーー！」

いや、これが俗に言うアルティメット火葬というもののでな？

「馬鹿か！！！」

怒られちつた：

『カミサマ物語』 第5話 完

第5話　「れが転生者　ねえ　鬱陶しいなあ（後書き）

次回は転生者SHIDEと6話を投稿します。

魔法の詠唱が疲れる…

多分次からは省略します

今回のネタはわかる人にはわかる…はず…

文才が欲しいなあ…

感想も欲しい…

誤字、脱字、アドバイスなどがありましたらぜひ「」報告をください。

第5・5話 転生者SHIDE（前書き）

転生者じゃなくてトリップですけどトリップ者って語呂が悪いので
転生者で統一します。

バイトがダルイ…

正月もバイトつて…

店長は僕に喧嘩売ってるんですかね？

第5・5話 転生者SHIDE

SHIDE 転生者

「お前には異世界へ行つてもいい」

「キタアアアアアツツツツ！」

やつたぜ……まさか本当にあるとは思つてなかつたけど……
これで俺のハーレムをつくりてやるぜ……！

「セヒ、ビリに行きたい？」

「『ネギま！』で頼む！」

あそこには女の子が可愛いし主人公はハーレム状態だ。薬味なんぞに
渡さねえ！俺が先にフラグ立ててやる！

「では特典はどうする？ああ、前に言つておけがやつすきは駄目だ。
私が排除されてしまふからな」

「どれくらい今までなりいんだ？ナギの魔力と回じとかならできる
のか？」

「……ふむ、それくらいなら大丈夫だ。あと他に何かあるか？」

「じゃあラカンと同じくらいの気と、あと、全属性の魔法を使える
よじこと、不老、俺の顔をイケメンにしてくれ……！」

やつぱりイケメンのほうがフラグを立てやすいからな！これで大丈
夫だ！本當はもつとチートな能力が欲しかったけど……ナギ並みの
魔力があつて全属性の魔法が使えたら充分だよな！不老はエヴァた
んのフラグを立てるためだ！ずっと一緒にいたら俺を頼るようにな
るだろ？！

「じゃあこれで終了だ。行つてきたまえ」

待つてろよー戦争にも介入してやつからな！！

「あつ、しまつた喧嘩を売つてはいけないやつがいることを伝える
のを忘れていたな……まあいい私にはもう関係ない、もう調子にのつ
て消滅一歩手前まで追い込まれるのは嫌だからな……」

⋮
⋮
⋮
⋮
⋮

「おつと、ついたみたいだな」

周りにはなんにもないな…おおつーちゃんトイケメンになつてゐる…
ちよつと試しに…

「『千の雷…』」

轟音を轟かせながら雷が落ちる。すげーよー! こんなに簡単に魔法が
使えるんなら戦争とか余裕じゃん…!

ん? あつちに誰かいるな…

金髪の女の子と…男? あれ? 金髪つて! とほもしかして…エウワ
たん! ? 襲われてるのか! ?
助けなきやー…………グフフッ。ユリヤ颯爽と現れてすぐに助けて
あげればフラグが立つぜ! -

「おー、お前！－俺のエヴァたんから離れろ－－」

「… 索引へ各色… 索引」

「な、なんだ貴様は！！」

まったく、魔力は多いが全然強そうじゃないな、俺の引き立て役に
ちょうどいいぜ！こんな奴原作にいなかつたからな、同じくトリッ
プしてきた奴か転生者か？

「なに？お前誰かの所有物だつたの？じゃあ俺絶賛誘拐中？やべーよ、犯罪じゃん。勘弁してくれよ！」

「そんなわけなかろいっ……あんなやつ見た」とも聞いた」ともないわ……」

クソッ俺のエヴァたんになれなれしくしゃがつて！！嫌がつてんだろうが！！

「待つててねエヴァたん！！今そいつから助けてあげるからね！」

「眠りを妨げたから死刑決定、異論は認めません。おいエヴァー！」
「いつ本当に知り合いじゃないよな！殺つちやつていいよな…？」

「だから言つているだろう…！…そんなやつは知らん！」

なにが死刑だ！なんにもできなさそうな顔しやがつて…！

「俺のエヴァたんと喋つてんじゃねえ！契約により我に従え高殿の
王来れ巨神を滅ぼす燃ゆる立つ遠隔補助魔法陣展開！第一から
第十目標捕捉！範囲固定！域内精霊圧力臨界まで加圧！百重千重
と重なりて走れよ稻妻！！『千の雷！！』」

詠唱付きだから魔法の威力は跳ね上がるぜ！これで終りだ…！

「聞かないんだよ、そんなん

魔法が消された！？

「な、なんだと！…俺の全力だぞ！…まさか…^{スキル}能力があるのか！？
クソッただ魔力がテカイだけだと思つていたのに！」

「よし、もういい。死ね」

やばい！完璧にあいつは俺を殺る氣だ！…クソッ…どうする？…こんな
ところで死んでたまるか！折角ネギまの世界に来れたのに…まだ
何もしてないんだぞ！？

「ちょっと…待つて…お前も転生者だろ？…同じ同郷のよしみで許
してくれよ…悪かったってば！…俺のハーレムのおいぼれもやるか
ら…！」

「どうだ！…完璧な条件だろ？…これでも譲歩したんだぞ！

「…」

「…何も知らないのか？」

「へつ…え、えっと『ネギま』を知らないのか？」

もひすでに原作キャラに会つてゐるのに…

「うんわかった、もういい。じゃあこれから俺がいう言葉を呴いて
いけ。そしたら助けてやる」

よし…やつぱり条件が良かつたんだな。油断したすき…

「おい、そいつを生かすのか！？また襲つてくるかもしけんのだぞ
！…！」

「あ、ああー。わかつた！（クククッ 馬鹿な奴だ。助かつた瞬間にこ
っちからやつてやる）」

「じゅ、『ハリネズミ』。『ビーフ』」

ん？

「ど、どつか

「『私を』」

何か…

「わ、私を？」

嫌な予感が…

「『殺していくださ』」

「殺して……え？」

「う、嘘だろ？ これって…

「どうした？ 言わないのか？ 言わないと死ぬんだぞ？」

「ど、どうする！？ 本当に言わないと死にそうだ… でも言つたら言つたで悪い予感が…

「い、いや、でも」「殺すぞ？」「ツツー！」、殺していくぞ！――

クソッ言つたぞ！

ブシュウウ――ストン。

「…………あ

あ…………れ…………?

何で…………俺の…………体が…………

あっ……ひ…………あるんだ……?

なん……で……あの男は……笑つてるん……だ?

最後に見えたのは俺のことを見けりを見るような目で見ていた男の顔と…………エヴァたんの顔だった…………

第5・5話 転生者SHIDE（後書き）

6話も投稿すると書かっていましたが明日にまわします。

誤字、脱字、アドバイスなどがありましたらどうぞ「報告」ください。
質問でも構いません。

……感想もください（切実）

第6話 イベニのチャイ ドブレイ? (前編)

今回は短め、多分次の次くらいにはエウアと別れます。

戦争編つまく書けるかしら..

第6話 イベリのチャイ ドプレイ?

side 早紀

うーす、早紀だ。なんだかんだで魔法も使えるようになつた。
細かいところはなああで済ましてるが問題はないので大丈夫だ
ら。

今俺とエヴァは色々な国を回つててる。エヴァは成長しないので怪
しまれるから基本長居はできない。

たまにバレて変なのが襲つてくるが全員血祭りにあげてるので大
丈夫…なはず。

んで、エヴァと一緒に行動してきて思ったことがあるんだが…

「お前さあ、なんか従者のものつくれよ」

「は? なんだ急に?」

だつてこいつバカス力魔法撃つけど敵が近付いてたら俺にやられ
ようとするんだもん。いちいち首を落とすのも乐じゃないんだぞー。

「な、ならばお前が私の従者に…」

やだ、絶対やだ。

「な、なぜだ! 仮契約パクティオすると強力なアーティファクトも手に入るか

もしそれないし、魔力供給もできるしいい事尽くめなのだぞ……？」

「その仮契約パクティオつてのが何かも知らんし、アーティファクトつてのも知らんが俺は充分強いし魔力切れとかも起こす危険もないから魔力供給もいらん。しかもそれじゃ本末転倒だ。

俺が戦うことになつちまうじやねえか。

「べ、別にいいじゃないか……仮契約パクティオの一つや二一つ……」

なんか言つてるが知らん。

「で、でも従者と言つてもどうすればいいのだ？」

「なんかできないの？お前

「まあ……人形を動かすことぐらいだったら……」

ほう。

「じゃあそれをお前の魔力で動くようにしたらどうだ？半自律人形みたいな感じで」

「な、なるほど。それはいいかも知れん……私に忠実に従うようにすれば……」

うんうん、大いに悩みたまえ。俺に迷惑掛けない範囲でな。

.....

……
……
……
……
……

「できたぞーー！」

「ケケケ、アンタガ早紀ノダンナカ？ヨロシク頼ムゼ」

「おい……なにこれ、ナイフみたいのを持つたうつこい人形が喋りかけてくるんですけど……」

「え、なにこれ」

「名前はチャチャゼロだ！」

いや、無い胸張つて言うなよ、俺が聞いてるのは名前じゃないのだよ。なんで人形サイズ？みたいな感じで聞いたんだが……

「いやあ苦労したぞ！近接戦闘を人形に任せようとしたら強度のことなども考えなくてはならないからな！若干戦闘狂の気が入ってしまったが……私たちに害はない」

「ダンナ、チョット斬り合オウゼ」

「これどこが害ないの?」この人形俺のこと殺さうとしてるよ? 完璧に刃物こっちに向けてるよ?」

なんなんだこの人形…

「まあいいや、これからよろしく。チャチャゼロ君

「オウ、コチラコソダゼダンナ。ケケケ」

といふで…

「チャチャゼロ」

「ン? ナンダ?」

「お前つて子供産んだりしないよね?」

「オイオイ、オレハ人形ダゼ? ソンナコトデキナイゼダンナ。ナン
デソンナコト聞クンダ?」

「いや、ちょっとな… 確認したかつただけだ。気にするな」

「?」

『カミサマ物語』 第6話 完

第6話 いれどのチャイ ドブレイ? (後書き)

チャチャゼロは本当にチャイ ドブレイを参考にして生まれたらしいですね。

脱字、誤字、アドバイスなどがありましたらぜひ「報告ください」。感想もください。それだけで作者のモチベは天元突破します。

第7話 ふたつなが あまつたよ（前書き）

あぶねえ、毎日更新が途絶えるといじりだつたぜ…

そろそろ戦争しなきや。

第7話 ふたつなが きまつたよ

SIDE 早紀

どうも、早紀です。チヤチヤゼロ君という新しいオトモダチを得て
ところののなかにぎやかになつてきましたこの世界ぶらり旅。

俺が何もしなくてもチヤチヤゼロとエヴァが迫つてくる敵を倒して
くれるので随分と楽になりました。

ビバ、動かない生活。

「おい！また来たぞ！お前も手伝え！」

「ケケケ、ダンナ、マタ殺ルノカ？」

ちくせう……寝てたのに……

「よつと」

まあいつも通り相手の首を落とす。最近手で首斬るのにも飽きてきたなあ……でも刃物はなあ……斬れすぎるからあまり面白くない。

いや、殺人が樂しいってことではないが。

「ク、クソ！『首刈』めーなぜ人をそんなに簡単に殺すんだ！！！」

「いや、お前らみたのが襲つてくるからだが…………ん？『首刈』？なんだそれ？おーい、Hヴァ知つてるー？」

喋りながらも相手の首を落とす。作業作業。

「ふう……終わったか……それはあれだろ？」「一つ名みたいなものだろ？私の『闇の福音』みたいなものだ。お前は今まで襲つてきた敵の首をことじとく落としていたからな……一つ名が『首刈』なんてものになるのも頷ける……」

へえ……『首刈』ねえ……

ちよつと喜んでしまった俺はもつ駄目なのだろうか……

「しかしあ前はなぜ倒し方がいつも首を斬ることなのだ？はつきり言つて魔法などで遠距離からやつたほうが楽だろ？。こだわりでもあるのか？」

「こだわりといつか何といつか……それはまあ……

「魔法は、さ。殺した感じがしないじゃんか」

「？、そりか？」

「おう、俺は別に殺人を楽しむような性癖を持ち合わせてないし戦うのも疲れるだけだ。あくまでも返り討ひをしているだけだしな。だがな……」

「だが？」

「戒めみたいなもんだ」

「戒め？」

「まあ追つてくるやつらが敵意をこじりに向けてきた時点で俺がそいつらを生かそうとは少しも思わないし殺すのに躊躇いもない。けど殺すなら自分の手でだ。魔法だと殺した感じがしないし、なにかが違う。ならどうするかというと首を斬る。いくら頑丈なやつがきたとしても首を斬られれば即終了だ、人間だったらな。まあ樂つてのもあるが……」勝鬨をあげた一いつて感じがするんだよ。まあ理由としてはそんなもんだ。素手が無理つてわかつたら別に魔法も使うしなんでもやるがな

「ふ～ん、そういうものなのかな？」

「そういうもんなのだ」

まあ割合としては『楽だから』ってのが八割がたを占めているけどな。

さて、これからどうするかな。やつて来るのは敵対者ばかり、安息の地はないものか。そろそろエヴァも独り立ちさせるかな、俺も一人でゆっくりとどこかに行つてみたい。

「エヴァー」

「なんだ？」

「ちょっと俺一人で旅するわー」

「…………は？」

「いやー結構俺も有名になつてきたことだしちょっと別れようぜ、お前も行つたことないところ行つてここのよ

「な、なぜだ！なぜそんなことを言つー私と行動したくないのか？もしかして…わ、私が嫌になつたのか？ど、どーだ？治すから教えてくれー！」

「ちよ、まつ、揺りさないで。頭揺らさないでお願いだから。酔う、酔つかる。

「いや、お前が嫌になつたとかではなくてな？」

「グスツ…なんでだ?」

「ちゅうと本格的に有名になってきたからな、お前が元々有名だったつてのもあるが最近襲ってくる奴らが鬱陶しい。一旦別れておけば追つてくる奴らも少なくなるだろ?」

「わ、私が嫌になったというわけではないんだよな?」

「お~お~、嫌になんかならねえよ。今まで一緒にいたり?俺は嫌になるような奴とは行動しねえ。お前のことは好きだぜ?」

「えー?あ、え、あうあうあう…」

おおう真っ赤ですね。これでもうすこし成長してたならサツと持ち帰つてベッドインなんだが…いかんせん幼女だ、もつたいない。

「じゅ、またな。まあお互いにそう簡単にくたばりそうも無いからな、また会おうや」

「あ、ああ。そうだな…早起き…」

「うふ?」

「死ぬなよ」

「わかつてりあ」

「ほんじゅ…」

「「またな」」

第7話 ふたつなが きまつたよ（後書き）

エヴァと別れました。

サクサク行きたいと思います。チャチャゼロが空氣のは「テフオです。

脱字、誤字、アドバイスなどがありましたらどうぞ「報告ください」。
感想もくれたら嬉しいです。といつかく下さい。本当に。

第8話 戦場を練り歩く（前書き）

さて、もう今年も終りですね。

みなさんほーの一年充実していましたか？

作者はいろいろとこつぱにこつぱいな一年でした。

小説もちゃんと続けていけれるように頑張って来年を過ごしたいと思ひます。

第8話 戦場を練り歩く

S H D E 早紀

エヴァと別れてからそれなりに時間が経つた。

なんだかんだで襲撃者もあんまりこないしこれはこれで良かつたかもしれない。それとこの前初めて知ったんだけどエヴァに懸賞金は600万ドルを超えるらしい。

600万つてどれくらいだ？

ちなみにエヴァの名前は結構いろんなところに知られているみたいで「悪い」とすると怖いエヴァンジョンソンに食べられるや」

みたいな感じで子供とかを叱り付けるネタにされてたりするみたいだ。

それどこの中マハゲ？

しかし俺は襲つてくるやつらに対して一回も名乗ったことがないのでも名は知られていらない。なんか知らんけど『首刈』つてのが知らない人がいないってレベルまで広がっているみたいでネームバリューがとんでもないことになっている。

正義正義言つてゐるやつらが俺をみた瞬間襲つてくれる。マジ迷惑。

「こんなことになるんだつたら顔とか隠しあけば良かつたな…

反省

今は周りにバレないようにつード付きの服を着て顔を隠している。
また俺は素手で首を刈るということでお名らしいので最近は武器を使つたり魔法を使つたりして敵には対処している。

武器は神からぶんどつたモノを使ってもいいんだがいろいろとチート過ぎるので使つていない。普段は粒子化させているので田立ちはしない。

今現在使つてゐるのは普通の刀。なぜ刀かって？…………かつこいいじやないか！

武器の扱い方も鍛えていたので何の問題もない。刀から銃、弓や槍までさまざまなもの使える。

かの有名なホーヤララ戦争ではどんなクラスでもいける気がする。

俺が今使つてゐる刀は有名なものでもなんでもない。勝利も約束されてないし魔力を無効化したりなんかもしない。正真正銘ただの刀、鉄の塊だ。

鍊金術もどきで作ったものでこれがなかなか役に立つ。ホントにただの刀なのでポキポキ折れるし斬れ味もすぐに悪くなる。

しかし創り出すのがとてもなく簡単なのだ。確かにしつかりやれば俗に言う聖剣、魔剣、妖刀なども創れるだろう。けどそういうのはいちいち考えて創らなきゃ駄目なので正直メンディ。

なんの特徴もないものだつたらただ『刀』と考へるだけでいいのでとても楽なのだ。それに時間がまつたくかからない。

創造とかはまだできない。ルーはできているが、まあ俺もそのうちできるようになるだろつ。

なんたつてカミサマなんだし。

さて、長々と話していたわけだが今俺がいる場所は……

「『雷の暴風！！』」

戦場だつたりする。

俺を狙つてきたわけでもなさそんなんだが……最近なんか争いが多発してるんだよね。

あつちにふらふら」うちにふらふらと彷徨つてゐる必ずどつかで
ドンパチやつてゐ。やだねえ……争いはなにも生まないのよ?

おつと、流れ弾が来る前に退散しなければ。
気付かれたら嫌だしね。

「『千の雷』」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア！」

プレゼントだ。近くで戦われてちょつとイラついてたんだ、報いは受ける。

魔法も前よりもまくコントロールできるようになつたんだよ？田の前にいるやつらだけを消し炭にするというのもなかなか難しい。前までは辺り一面を攻撃してエヴァに怒られたからな。

さて、争いが起つてゐるのはどうしてかねえ？

第8話 戦場を練り歩く（後書き）

次回から本格的に戦争。
うまく書けるか心配です。

では皆様、良いお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6868z/>

～力ミサマ物語～

2011年12月31日23時31分発行